

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：32631

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2013

課題番号：21720325

研究課題名(和文) 東アフリカ農村の水資源開発と社会的対応に関する比較研究

研究課題名(英文) Comparative Study of Social Practices and Resources in Central Kenya.

研究代表者

石井 洋子 (ISHII, Yoko)

聖心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：30431969

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：ケニア共和国は、資源をめぐる様々な葛藤を抱え込んできたが、その発現の一つに2008年に深刻化した大統領選挙後の紛争があった。人々は大きな試練に見舞われ、多数の人が故郷を追われて国内避難民となったが、ケニア山周辺の資源を融通して社会を回生させる様々な実践もあった。ケニア山からの水資源は、ケニア最大の水田地帯に暮らす人びとの生活も支えている。本研究では、ケニア共和国の中央高地を中心とした地域社会を対象として、これまで実施した個別実証的な研究を基礎に開発政策の影響を受ける東アフリカ地域における比較研究を行い、開発と文化の連関を考察した。

研究成果の概要(英文)：Kenya faced serious dispute after the presidential election of the end of December 2007. The dispute was driven in part by unadjusted land distribution in Rift Valley Province. Not surprisingly, the internally displaced persons who settled in new places also faced the material shortage after a while. But we could observe the social practices to adjust resources. And specially the water resource from Mt. Kenya supported rice farmers in submontane villages. In this research, I tried to examine the relationship between resource development and culture in East Africa.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：ケニア 開発援助 ギクユ

1. 研究開始当初の背景

(1) アフリカにおける人々の生活は過酷な状況にある。これまで、多くの研究者が支援と地域社会をめぐるあり方を論じてきたが、その多くは開発経済学や国際援助論など長期的視座を持つマクロな政策研究であり、個別社会の実態にまで踏み込んで議論される事は多くなかった。

(2) 開発の社会(文化)人類学的研究は、国際的な要請もあり、国内外の研究者からの注目を集めている。そこで本研究は、これまで蓄積された業績と方法論を土台にフィールドワークによって知見を深め、社会に資する研究を目指す。本研究の開始に際して、筆者は1995年以来、注目しているケニア共和国の最大民族集団であるギクユと呼ばれる人々の民族誌的資料をベースとして、支援の動きと人々の生活の関係を検討していく。

2. 研究の目的

(1) 本研究の大きな目的は、従来の開発至上主義的な流れが生み出した様々な弊害を真摯に受け止め、21世紀の「ポスト開発の時代」を共に歩むための道しるべとなる研究を遂行することにある。

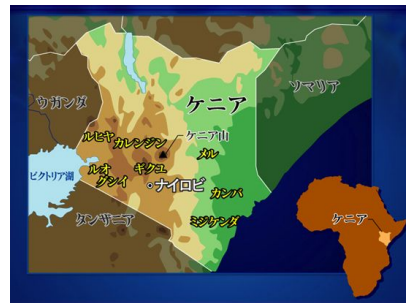
(2) ケニア共和国は、紛争や耕作地不足、気候変化にともなう食料不安、疾病など様々な問題を抱える中で、資源をめぐる調整を行うことが差し迫った事案となっている。本研究では、ケニア中央高地周辺にある複数のギクユ人地域でのフィールドワークを中心として、資源をめぐる開発と文化の連関を考察する。

3. 研究の方法

(1) 4年間実施(産休により22年度は中断)した本計画は、ケニア中央部に位置するケニア山南麓での灌漑開発計画に関するデータ(『開発フロンティアの民族誌』石井洋子 2007年)を基礎として、資源をめぐる人々の考え方・実践を具体的に捉えて、比較検討する。

(2) 折しも、本研究を開始する直前に深刻化したケニア国内紛争(後述)の後遺症

によって、調査を予定していたケニア山南麓の水田地域へ行けなかった時期もあったが、あらたに時代を映す「紛争後社会」への視点を獲得した。そこではギクユ人国内避難民が資源をめぐる問題群を抱え込んでいたが、移住にともなう生活再建の様子を参与観察することによって新たな知見を得た。



(ケニアの地図)

4. 研究成果

以下、本研究テーマに関わる業績について、2つのカテゴリーに分けて説明する。

(1) ケニアの紛争と開発-資源分配・共有をめぐる実践

アフリカ地域の資源と開発の問題を論じる上で、避けられないのは、戦争や紛争への視点である。本研究は、2008年以降に深刻化した「ケニア大統領選後の紛争」と国内避難民による克服という一連の出来事を通して、人々が水資源をどう捉え、対応しているのかを具体的に見た。

同紛争は、大統領選をめぐる不正に対する抗議行動に発した社会的混乱であり、1,133人の死者と最大で65万人もの国内避難民を生み出す惨劇となった。マスコミは、大統領選挙の事実上の一騎打ちとなったルオ人候補とギクユ人候補の支持者たちによる「民族紛争」と報道した。しかし、実際は民族の違いよりも、ケニア西部を縦断するリフトバレー州の土地をめぐる英領時代に端を発する軋轢や、貧富の格差が根源にあることが分かった。英領時代とその後の土地政策が資源をめぐる深刻な葛藤を生みだしていた。

*

実地調査によると、故郷を追われた65万

人の避難民の大多数は、一時は難民キャンプに身を寄せながらも自分の村に戻ったり新しい村を創出して、異民族の隣人との共生を再開していた。焼き討ちにあった自宅を再建しようと、故郷に戻った家族の多くは、外部からの支援を受けて生活を再開していた。帰還した家族は徐々に敵対した隣人との対話を再開し、破壊された関係を修復する努力をしていた。調査では、その語りを集めた。紛争の激しかった地域の多くは異民族混淆の移住地であるため、住民たちは他者と共生する術を心得ており、紛争で生じた大きな壁をも乗り越える原動力を備えているようであった。

筆者はまた、暴動で全てを失った人びとが難民キャンプで出会い、外部からの助力を受けて、新村創出の努力をしている様子を観察した。調査した複数の新村では、故郷の村にあった住民組織が再創造され、さまざまな揉めごとを処理する仕組みができていた。また、日本の NGO の技術と資金を受けて、水供給のシステムを確立していた。村の境界や民族を超えての水管理委員会が共同で設立され、定期的に話し合う場を持っていた。そこでは、外部からの資源や情報を取捨選択して十分にに取り込み、自前の回復力を強化する草の根レベルの人々の努力を観察した。こうした「歴史なき社会」への眼差しから、紛争後の果てしない困難を生き抜き、共生社会を取り戻そうとする人間の力が見えた。

*

「伝統的」な小規模社会を好んで研究してきた人類学者にとって、破壊的な戦争の後景に迫っていく作業は容易ではないが、そこには往々にして、資源をめぐる争いの歴史が隠されている。しかし、時代に翻弄されながらも、社会を回生させ、資源に接近していこうとする人びとの「力」を具体的に知ることは、21世紀の大きなうねりを生きる私たちにヒントを与えてくれる。

(2) 開発をめぐる人類学研究と資源問題

上述の紛争の影響によって、現地調査が滞ったが、本研究ではケニア山南麓のコメ生産地を再訪した。

アフリカ第二高峰のケニア山周辺には肥

沃地が広がり、そこに暮らす人びとは標高差のある肥沃地で多角的農業をおこなっている。ところが、人口増加にともなう土地不足の深刻化により、政府は平野部一帯を開拓して、近代的灌漑プロジェクトを開始した。ケニア山の水系を利用し、約 6,000ヘクタールで国内生産量の6割以上のコメを産出する水田地帯を建設したことで、地域住民は生活の糧を得る事ができた。しかし、我田引水の行為の横行により、水資源をめぐる周辺住民との葛藤が見え隠れし、水を媒介とする病気も後を絶たない。いわゆる開発原病の問題がある。

2013年5月に行われた第5回アフリカ開発会議では、日本はアフリカ援助額の増額を約束し、とくに稲作などの在来知を生かし、貿易赤字と食糧増産に寄与するための支援策を講じた。日本の援助によって、先の水田地帯を潤すダム建設や用水路の整備が実践されつつあるが、そうした援助が経済のみならず、生活の質の向上に繋がっていかれるのかを社会文化的に精査していく必要がある。

*

開発をめぐる実践は、豊かな社会をめざす営みである。「豊かな社会」とは、お金で換算できる商品の溢れる社会をイメージするだろう。しかし経済が優先される余り、過剰開発による環境破壊がおき、地域の伝統や文化的活動が軽視され、高齢者や障害者が暮らしにくい社会を「豊か」とは言えない。

人間の経済的行為は、損得だけで語りつくす事はできず、多様な価値観に基づいている。そうした文化の違いを理解した上で、異文化はどう出会えば良いのか。

たとえば、圧倒的な経済力と技術力を持つ人びとが、そうした力を持たない人びとを支援する際、社会・文化的側面を軽視すれば非可逆的な文化変容をもたらしてしまう事もある。非対称的な出会いや、上からの開発はもはや歓迎されないというジレンマが起きてしまっている。むしろ、自文化中心主義の考えに陥ることなく、他者と真摯に向き合い、学び合おうとする努力が必要になる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

石井洋子、土地を求めて東へ、西へ—ケニア山麓の民と紛争後社会への道筋、季刊民族学、査読無、137巻、2011、pp.57-92

石井洋子、『苦難』をめぐる民族誌—ケニア国内避難民の経験に関する覚え書き、聖心女子大学論叢、査読無、114号、2010、pp.73-98

石井洋子、人間の『安心』と開発援助、国際開発学研究、査読有、Vol.8、No.2、2009、pp.97-109

〔学会発表〕(計3件)

石井洋子、『HUMAN：人間・その起源を探る』映像資料と現在の比較をもとに(コメント)、熱帯アフリカ諸社会の文化の変容と持続、2014年3月28日、京都大学

石井洋子、地域研究コンソーシアム共同企画講義—エスノグラフィーを書く、第三回セミナー：エスノグラフィは社会とどう向き合えるのか、2012年12月15日、大阪大学

石井洋子、支援の人類学の射程、国立民族学博物館・日本文化人類学会、実践人類学ワークショップ、2010年2月21日、国立民族学博物館

〔図書〕(計3件)

石井洋子・飯田卓(共著)、放送大学教育振興会、『文化人類学』(内堀基光・奥野克巳編著)「11章 環境と開発」、2014、pp.142-155

石井洋子(共著)、放送大学教育振興会、『文化人類学』(内堀基光・奥野克巳編著)「12章 人と人のやりとり」、2014、pp.156-169

石井洋子(共著)、放送大学教育振興会、『文化人類学』(内堀基光・奥野克巳編著)「13章 あらそいと平和」、2014、pp.170-181

〔その他〕

放送大学放送授業の制作

「第11回 環境と開発」(飯田卓と共同講師)『人類学研究('14)』放送大学放送授業担当講師 2014年度制作

「第12回 人と人のやりとり」『人類学研究('14)』放送大学放送授業担当講師 2014年度制作

「第13回 あらそいと平和」『人類学研究('14)』放送大学放送授業担当講師 2014年度制作

「第8回 河川と湖沼をめぐる環境問題と生活文化」『人類学研究('10)』放送大学放送授業 2010年4月(放送大学教授スチュアート・ヘンリ(本多俊和)・放送大学教授内堀基光編集下のゲスト講師として出演) 2009年度制作

6. 研究組織

(1) 研究代表者 石井 洋子 (ISHII, Yoko)
聖心女子大学・文学部・准教授
研究者番号：30431969